

子ども絵本における祖親性表現

小野寺 理佳

1. はじめに

子ども絵本は社会化エージェントのひとつである(Ansello 1978)。本稿は、祖親性⁽¹⁾をめぐるイメージ構築を担う媒体としての子ども絵本(以下、絵本と記す)に注目し、そこにおいて、祖父母がどのような人物として描かれているのかを探り、我々の社会が祖父母世代に対して付与しているイメージの特徴を抽出することを試みるものである。人々が祖親性に対してもっている見方に研究の目を向けることは、「祖親性とは何か」という問いを追究するうえで不可欠な作業であると同時に、若い世代のための祖父母教育、即ち、加齢・高齢者教育プログラムを考えるための準備作業として位置づけられよう⁽²⁾。この場合、絵本は「文学作品」あるいは「芸術作品」としてではなく、「祖親性についてのテキスト」としてとらえられることになる。従って、求められる作業は、プロットや表現の巧拙、芸術性等の質を精査することではなく、祖父母をめぐる様々な枠組み(身体的条件、物語の舞台、役回りや活動内容、孫との関係性)を取り出し、検討することが中心となる。高齢化が進行するなか、高齢者の多くが長期にわたって祖父母であることを経験することを考えるならば、祖父母イメージについて探ることは、即ち、高齢者が社会においてどのようにとらえられているのか、その高齢者像はどこまで現実を反映したものであるのか、を検証するという意義をも併せ持つものと思われる。

このような問題意識に基づいて、本稿では、絵本のうち祖父母が主要なキャラクターとして登場する作品において、彼らがどのように描写されているのかをみてい

くことにしたい。以下、2は先行研究の整理と本稿の課題、3は調査方法、4は調査結果および考察、5はまとめと今後の課題である。

2. 先行研究の整理と本稿の課題

先行研究を探ると、絵本研究あるいは祖親性研究において、社会化エージェントとしての絵本に注目する視点から、絵本における祖親性表現を考察することを中心テーマに掲げたものは決して多くはない。そこで、本稿に関わりが深いと思われる分野へも目配りすることとし、絵本を含めた児童文学全般を対象としているもの、祖父母ではなく高齢者を取り上げている研究をも含めて広くみていく。以下、国内外の諸研究の流れをみながら、そこにおいて何が明らかにされ、何が課題として残されているのかを整理し、それらを踏まえて本稿の課題を述べることにする。

まず、当該研究の先達であるアメリカにおける先行研究をみると、初等教育に従事する教師あるいは学校司書に向けての実践的な研究が圧倒的に多い。これは、高齢社会の到来によって、加齢現象や高齢者という存在を子どもにどのように教えるか、ということが教育現場における重要課題のひとつとして認識されるようになったことによる。その場合、子ども向けの本にあらわれる高齢者の多くが祖父母の地位にあることから、祖父母への関心も高まったと考えられる。そこで指摘されている主な問題は次の2点に整理される。ひとつは、祖父母像のステレオタイプ化(多様性がないこと)、もうひとつは、そのステレオタイプがネガティブイメージ(非健康的、受動的、無気力等)であること、である。

従って、そこから導かれる研究の傾向として、祖父母がネガティブなステレオタイプとして描写されることにより、世代間関係において孫が祖父母に対してマイナスイメージを抱くことを懸念する結論に至るものが大勢を占める (Constant 1977, Ansello 1978, Janelli 1993, Crawford 1996, McElhoe 1999)。基本的に、「ステレオタイプ化がエイジズムをもたらす」(Ansello 1978)との前提に立つものである。例えば、Janelli (1993) は、1966～1984年発行の作品と1985～1990年発行の作品を比較し、多少の変化はあるにせよ、祖父母の外観やアクティビティの内容は相変わらずステレオタイプであると述べる。多くの祖父母は白髪で眼鏡をかけ、祖母は料理や孫の世話をし、祖父は知識や歴史を語るのである。また、McElhoe (1999) は、自立的でプロダクティブな社会の一員として祖父母が描かれることはほとんどないこと、健康で活躍する祖父母世代が忘れられていること、絵本作家自身が社会化されるプロセスでステレオタイプ化された祖父母イメージを身につけてしまっている

であろうこと等を指摘する。この他、祖父母にポジティブなイメージを与える作品の存在 (Watson 1981) や近年になってそうした作品が増えつつあること (Mavrogenes 1982, Beland & Mills 2001) を指摘する論考もあるが、それらは祖父母が孫に対してもつポジティブな影響力 (自立して生きる姿勢を示す, 幸福や人生について教える, 孫の理解者となる等) に注目するものであり, 祖父母のもつ客観的条件がネガティブなステレオタイプとして描写される傾向にあることを否定するものではない。しかしながら, これらの指摘は英米文化圏で出版された作品に関するものであり, そこで得られた知見をそのままわが国に当てはめることはできない。

一方, 日本国内における研究蓄積は極めて乏しい。わずかな既存研究をながめてみると, その特徴をなすと同時に研究の深化を阻んでいると思われるふたつの点が浮かび上がる。1点目は, 絵本・児童文学を「子どものための善きもの」としてとらえようとする傾向が強く, 社会化エージェントとして, 意図するせざるに関わりなく様々な影響をもちうる媒体であるとの認識が不足していることである。例えば, 追田ら (1998) や美谷島 (2002) は, 創作絵本に描かれる「老人たち」(祖父母含む) を検討し, 子どもに伝えられようとする老人・老いのイメージを考察するが, その内容は作品論にとどまっている。

2点目は, 祖父母と高齢者との混同がみられることである。アメリカの研究においても, 絵本や児童文学にあらわれる祖父母イメージが現実と比較して老いすぎていることが指摘されているが, 日本の場合は, 「おじいさん・おばあさん」という語の意味するところが, 場合によっては「お祖父さん・お祖母さん」であり, また場合によっては「お爺さん・お婆さん」であるために, さらに混乱が深まっていると思われる⁽³⁾。これについては上記の2研究の他, 堀川 (2002) の論考があげられよう。堀川は, 絵本や児童文学における高齢者像のステレオタイプ化を指摘するが, 高齢者と祖父母とを区別していない。高齢者も祖父母も一律高齢者という括りで扱われるのでは, 厳密性に欠けるといわざるをえない。

そこで本稿は, 上記の諸点を踏まえ, 祖父母の地位にある人々を選び出し, 日本で出版された絵本 (翻訳も含む) において祖父母像がどのように描写されているのかを検討する。具体的には, ステレオタイプ化がみられるとしたらそれはどのようなものか, 祖父と祖母の描写はどのように異なるのか, 外国作品と日本作品の違いはどこにあるか, といった点について, 先行研究の知見をもとに考察していくことになるだろう。

3. 方法

3.1. 調査対象

X県の人口180万人規模の大都市にある市立中央図書館（2003年度蔵書約55万点）所蔵の絵本を取り上げた。図書館とは地域に広く開かれた公共の教育機関であるため、その所蔵絵本にあらわれる祖父母像は人々の祖親性イメージ構築において少なからぬ影響を及ぼしていると思われるからである。

3.2. 資料の選出

就学前後の子どもを主な対象とする物語絵本のうち、祖父母がメインキャラクターとして登場するものを選出するに際しては、二段階の作業をおこなった。まずはじめに、先行研究との比較対照のため1980年以降発行の作品に限定したうえで、本のタイトル中に祖父母の呼称（「おじいちゃん」「おばあちゃん」「おじいさん」「おばあさん」「じいちゃん」「ばあちゃん」「じいさん」「ばあさん」等）が含まれるものをピックアップしてリストを作成した。事前の調査によって、祖父母世代が登場人物として主要な地位を占める場合、タイトルに祖父母の呼称が現れる確率が極めて高いことが確認されたため、この方法を採用した。これによって選び出された作品は、1980-2003年出版の約16000点の絵本のうち222点である。次に、このリストに従って現物を以下の3点に関してチェックし、本調査の対象に該当しないと思われる作品を除外した。

- ①擬人化された物象が登場しないこと（擬人化された動植物が登場するものを除外する）。
- ②realistic fiction であること（物語絵本は創作絵本と昔話絵本に大別されるが、ここでは創作絵本に限定する。つまり、伝記、神話、伝説、民話、あるいはそれらの再話等を除外する）⁽⁴⁾。
- ③祖父母と孫の関係性について言及されていること（高齢者・老人という意味でのみ「おじいさん」「おばあさん」等の語が使用されているものを除外する）。

この一連の作業の結果、対象となる作品は71点にまでしぼられた。1点（外国作品）を除いては、祖父母いずれか一方が主要人物である。上記の1点については祖父と祖母それぞれについて検討する。従って、日本の作品39点（祖父17, 祖母22）、外国作品33点（祖父20, 祖母13）、計72点の祖父母像を取り上げることとする。

3.3. 調査項目

調査項目は先行研究を参照して次の4項目とし、この4項目に関する描写（文章および絵）の有無を調べた。主な内容をまとめたものが表1～5である。表1の「健康」、表2、表4については、該当する事項がひとつだけ選択され、表1の「身体」「服装等」、表3、表5については、該当する事項がすべて選択されている。

- ①外観…身体的特徴、健康状態、服装・持ち物（表1）
- ②生活環境…物語が展開される舞台、祖父母の同居家族、祖父母の居住環境（表2）
- ③アクティビティ…日常生活、生活態度、社会的活動（表3）
- ④孫との関係性…③のアクティビティにみられる祖父母と孫との関係性（表4、表5）

4. 結果と考察

ここでは、上で示した項目による調査結果を考察する。

4.1. 外観

表1 外観

人(%)

		祖母(n=35)		祖父(n=37)	
		日本(n=22)	外国(n=13)	日本(n=17)	外国(n=20)
身体	白髪（灰色も含む）	18(81.8)	13(100.0)	16(94.1)	20(100.0)
	[束髪]	[12(54.5)]	[6(46.2)]	—	—
	白髭	—	—	5(29.4)	10(50.0)
健康	健康	12(54.5)	6(46.2)	7(41.2)	7(35.0)
	衰え	4(18.2)	4(30.8)	7(41.2)	7(35.0)
	死	6(27.3)	3(23.1)	3(17.6)	6(30.0)
服装等	眼鏡	10(45.5)	3(23.1)	5(29.4)	7(35.0)
	和装	13(59.1)	—	7(41.2)	—
	クラシックスタイルの洋装	—	7(53.8)	—	9(45.0)
	ステッキ	2(9.1)	1(7.7)	3(17.6)	4(20.0)
	エプロン・割烹着	12(54.5)	3(23.1)	0(0.0)	1(5.0)

* [束髪]: 白髪なおかつ束髪

和装: 和服, 足袋, もんぺ, 股引, ステテコ, 下駄等

クラシックスタイルの洋装: ロングワンピース, 造花のついた帽子, 三つ揃いスーツ, 蝶ネクタイ, ベスト, サスペンダー, 山高帽等

はじめに祖父母の外観的特徴をみると、彼らにはそれと判断されうる風貌が与えられていることがわかる（表1）。まず、日本・外国の作品を問わず、祖父母の大部分は白髪で描かれる。これが祖父母をあらわす非常に明解なビジュアルであり、孫の両親との差別化をはかるための記号として極めて有効と考えられているからであろう。祖母の場合は白髪の束髪、祖父の場合は白髪に加えて白い口髭や顎髭をたく

わえた姿として描写されることも多い。さらには、丸くなった背中、額や口元のしわ、ふくよかな、あるいは痩せ細った体つき等様々な描写がみられるが、いずれも「老いた」イメージが強調されているといっていよう。この老いのイメージは、彼らの多くが何らかの衰えや衰えに関わる困難を抱えていることでさらに強められる。具体的には、目や脚の衰え、入れ歯、病気の進行、怪我、無気力、脳卒中とりハビリ、歩行困難、盲目といったものである。その衰えは、時には死を、あるいは、死を予期させるほどの深刻な状態を祖父母にもたらしめている。老人性痴呆を患う祖父母も4作品において登場する。

老人としての身体を与えられた祖父母には、また、老人を思わせる古めかしい装いが与えられる。特徴的なものとしては、まず、眼鏡（丸眼鏡）がある。その他、日本の作品であれば、和装の多さが目を引く。この数字は現実には比べれば極めて高いといえる。野良着以外の祖母の活動的なスタイルは皆無である。一方、外国作品でもクラシックな装いがおおよそ半数を占める。パイプも祖父の指標のひとつである。

4.2. 生活環境

表2 物語の舞台

人(%)

	祖母(n=35)		祖父(n=37)	
	日本(n=22)	外国(n=13)	日本(n=17)	外国(n=20)
祖父母宅	4 (18.2)	6 (46.2)	6 (35.3)	11 (55.0)
[独居]	[3 (13.6)]	[2 (15.4)]	[2 (11.8)]	[5 (25.0)]
孫宅	4 (18.2)	3 (23.1)	0 (0.0)	3 (15.0)
同居宅	12 (54.5)	3 (23.1)	8 (47.1)	4 (20.0)
病院他	0 (0.0)	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	2 (9.1)	0 (0.0)	3 (17.6)	2 (10.0)

*独居：祖父母宅なおかつ独居宅であることが明示されているもの

その他：散歩中、旅行中

では、祖父母にはいかなる生活環境が用意されているのだろうか(表2)。日本の作品においては孫一家との同居が半数前後を占める。祖父母宅が舞台となる比率が祖父と祖母とで異なるのは、配偶者が健在の間は夫婦で暮らし、配偶者亡き後に孫一家と同居するという設定が多いからであろう。孫一家と同居するのが祖母において多いのは、一般に祖母の方が長命であるからと思われる。一方、外国作品では、原則として祖父母と孫一家とは別居である。従って、祖父母宅を舞台とする作品がおおよそ半数を占め、孫が夏休みに祖父母の家に長期滞在する、あるいは、祖父母が孫一家を訪問すること等で孫との接触が確保される。同居が選択されるのは、重篤な病気であるか、あるいは、最晩年を迎えて身の自立が不可能になった場合であ

る。

別居する祖父母は、日本・外国を問わず、概して、田舎の古い一軒家で、古めかしい家具調度で囲まれて暮らすものとされている。例えば、日本の作品ならば、土蔵のある古い日本家屋、縁側、囲炉裏、蚊帳、火鉢といったものが描かれ、外国の作品ならば、古い自転車や手押し車、ドライフラワーの香り、ロッキングチェア、大きな壁時計が配される。祖父母の家は「去年とおんなじ」で、「なつかしいにおい」がして、「なにもかもそのまま」であり、孫はそのことに「ほっと」するのである(A)。そこからわかるのは、「不変であること」が祖父母の大きな魅力とされていることである。従って、祖父母が住む（あるいはかつて住んでいた）田舎町、昔ながらの商店街、小さな港町、山奥の村、海辺の家は、孫たちが暮らす町に比して、静かでのんびり、人情にも篤く、住み心地のよい場所として描かれることになる。

4.3. アクティビティ

表3 アクティビティ

人(%)

	祖母(n=35)		祖父(n=37)	
	日本(n=22)	外国(n=13)	日本(n=17)	外国(n=20)
家事	12(54.5)	7(53.8)	0(0.0)	2(10.0)
畑・園芸	6(27.3)	1(7.7)	1(5.9)	8(40.0)
仕事(現役)	2(9.1)	0(0.0)	2(11.8)	2(10.0)
仕事(リタイア～セミリタイア)	0(0.0)	0(0.0)	7(41.2)	0(0.0)
仕事(リタイア)	0(0.0)	0(0.0)	1(5.9)	3(15.0)
趣味	2(9.1)	2(15.4)	1(5.9)	0(0.0)
編み物	7(31.8)	2(15.4)	0(0.0)	0(0.0)
社交	2(9.1)	3(23.1)	3(17.6)	0(0.0)
孫の世話	17(77.3)	9(69.2)	1(5.9)	5(25.0)
孫と楽しむ	6(27.3)	3(23.1)	9(52.9)	15(75.0)
孫に話す	7(31.8)	9(69.2)	6(35.3)	15(75.0)
孫に教える	3(13.6)	2(15.4)	5(29.4)	8(40.0)

*趣味：祖父母の習慣あるいは楽しみとしての読書、カードゲーム、将棋等
孫に教える：自転車、泳ぎ、釣り、星の見方、動物の世話、畑の作り方等

次に、祖父母の日常のアクティビティを具体的にみてみよう(表3)。基本的に祖父母は「リタイアした（あるいはリタイアに近い）存在」として描かれる。彼らの生活世界は決して大きいものではなく、地理的にも人間関係においても、家の中や家の周辺以上の拡がりをもつことは少ない。自ら車を運転して出歩く場面もみられない。

ここで指摘すべき点は2点ある。1点目は、祖父と祖母の相違である。例えば、祖父についていえば、職業に関わる記述が祖母に比べてはるかに多い。これは、仕

事が生涯を通じて祖父のアイデンティティをなす重要な拠りどころであり続けることを示すと思われる。ゆえに、リタイアした祖父は、現役当時の活躍ぶりを孫に語ることでそれを確認する他は、総じて孤独で元気がない存在として描かれることが多い。例えば、ある外国船の元船長は、日課である散歩に出かけられないほどの虚しさにおそわれている(B)。これは、祖母が自分の居場所をもち、「今」を生きているのとは対照的である。祖母は日常生活において家事全般をとりしきる主婦として描かれ、孫の世話も一手に引き受けている。「エプロン・割烹着」がこの性別役割分業を端的に示しているといえるだろう(表1)。祖父のエプロン姿が描かれているのは1作品のみである。祖父には、専ら、孫と外遊びをする、孫にものを教えるといったアクティビティが割り振られる。

2点目は、日本の祖父母と外国の祖父母の相違である。これについてはふたつあげられよう。ひとつは、日本の作品においては外国作品以上に性別役割分業的描写が多いことである。料理や掃除、孫の世話に加え、庭先で野菜を育てること、編み物や針仕事をするのが祖母の重要な役回りとして描かれる。このことは、日本の祖母が愛情深い優秀な主婦であること(あらねばならないこと)を物語る⁽⁵⁾。彼女たちのおよそ半数がエプロンまたは割烹着をつけた姿で描かれることがそれを裏付ける(表1)。日本の祖母の場合、編み物は家事でもあるが、趣味でもあり、時には近隣からの頼まれ仕事でもある。祖母、あるいは祖母の生活空間を描いた絵のなかに、しばしば、「毛糸と編み針」が印象的に配されている点に注目したい。一方、祖父についてみると、日本の祖父の描写においては、職業に関わる記述がなされているものが外国作品より多いことに気づく。現役およびセミリタイアの祖父はすべて家業(指物師、農家、畳屋、漁師、パン屋、豆腐屋、竹屋)をもち、仕事はずっと変わらず彼の傍らにあるものとされている。そして、細々とではあっても仕事に関わり続けることが祖父の生きがいとなっている。外国作品では、完全に仕事から離れ、田舎暮らしをしながら動物を飼い、園芸を楽しむ生活が描かれることが多いのとは対照的である。日本の場合は、先述のように畑や園芸も家事の範疇とされ、即ち祖母の領分として描かれ、祖父は大工仕事やペンキ塗りといった家の外回りの仕事もしていない。祖父が家庭で果たすべき役割はほとんど用意されていないのである。このように、日本の作品における祖父母は、外国作品に増して、「男性は仕事、女性は家事」という性別分業体制に則って配置されているといえる。

もうひとつは、孫との対話の量および内容が日本の作品と外国の作品とでは異なることである。外国の作品に頻出する祖父母のアクティビティとして「孫に話す」

があるが、そこでは、「死」も日常会話のなかで語られる。「年金生活者のつぎには何になるの?」「そうさなあ、おしまい…ってことかな」「おしまいって?」「死ぬということさ」(E)、「おばあちゃん、もうじき死んじゃうの?」「たぶん、もうすぐね」(F)といったやりとりがある。しかしながら、日本の作品では、こうした場面は非常に少ない。対話の量がそもそも少ないうえに、「死」「人生」「時間」といった抽象的なトピックについての対話はほとんどなされない。外国作品における祖父母と孫は対話を深めることでその結びつきを強めていくのに対して、日本の作品における世代間の親密性は、言葉ではなく、日常的な接触のなかで「感じ取られるもの」として情緒的に構築される。外国作品のなかには、生活の細部は描かれず、祖父母と孫との濃密な時間、語り合う時間だけが切り取られた形の作品⁽⁶⁾があるが、日本の作品にそのようなタイプのものはみあたらなかった。

4.4. 孫との関係性

最後に孫との関係性をみてみよう。基本的に、絵本にみえる祖父母と孫との関係性は良好である⁽⁷⁾。祖父母との永遠の別れ（あるいはその予感）が描かれているものも多いが、孫は祖父母との交流およびその死をめぐる経験から最終的には豊かなものを獲得している。Belandら（2001）の指摘するように、祖父母が孫にとっての貴重なロールモデルであり、また、愛情・寛容・喜び・平和・信頼等の精神を育てることを教える存在である点は疑いない。その意味において、祖父母はポジティブな意義をもつ人物として描かれているといえる。これは、作家たちが、「おそらく自分自身の子ども時代を再演し、理想化し、修復したいという動機から、子どものための文学を書く」（Hunt 訳書 2001）からであろう。

表4 続柄 人(%)

	祖母(n=35)		祖父(n=37)	
	日本(n=22)	外国(n=13)	日本(n=17)	外国(n=20)
祖母と孫娘	15(68.2)	10(76.9)	—	—
祖母と孫息子	7(31.8)	3(23.1)	—	—
祖父と孫娘	—	—	4(23.5)	8(40.0)
祖父と孫息子	—	—	13(76.5)	12(60.0)

では、その親密な関係性にステレオタイプ化はみられるのだろうか。既に4.3.において指摘されたように、祖母には孫の援助者としての役割が、祖父には主に遊び仲間や教師としての役目が与えられている。これを、祖父母と孫の性別組み合わせ(表4)別にみるとどうだろうか(表5)。それによると、絵本にあらわれる祖父母

表 5 孫との関係性

人(%)

	祖母(n=35)				祖父(n=37)			
	日本(n=22)		外国(n=13)		日本(n=17)		外国(n=20)	
	孫娘(n=15)	孫息子(n=7)	孫娘(n=10)	孫息子(n=3)	孫娘(n=4)	孫息子(n=13)	孫娘(n=8)	孫息子(n=12)
孫の世話	13(86.7)	4(57.1)	6(60.0)	3(100.0)	0(0.0)	1(7.7)	1(12.5)	4(33.3)
孫と楽しむ	6(40.0)	0(0.0)	3(30.0)	0(0.0)	1(25.0)	8(61.5)	7(87.5)	8(66.7)
孫に話す	5(33.3)	2(28.6)	8(80.0)	1(33.3)	2(50.0)	4(30.8)	4(50.0)	11(91.7)
孫に教える	2(13.3)	1(14.3)	2(20.0)	0(0.0)	1(25.0)	4(30.8)	4(50.0)	4(33.3)

*表3のうち孫との関係性に関わる後半4項目を、祖父母と孫の性別組み合わせ毎に整理した。

と孫の組み合わせにおいては、同性同士（祖母・孫娘、祖父・孫息子）が6～7割以上を占めており、その関係性は異性同士の組み合わせに比して豊かな内容をもつ傾向にある。祖母と孫娘の親密性は、羽根枕をつくる、看病をする、畑で野菜をとる、買い物に行く等、家事に共に関わることで、あるいは、その合間のくつろいだ時間に昔話や人生についての話が交わされることで紡がれる。それに対して、祖父と孫息子の親密性は、海や公園を散歩する、カウボーイごっこや家出ごっこをする、自転車・逆上がり・泳ぎを練習する等、アウトドアでの遊び、必要な技術の伝授という内容を中心に構成される。日本の作品と外国の作品の違いとしては、4.3.でも述べた通り、世代間の対話が日本の作品においては少ないことがあげられる。

このように、祖父母と孫の交流内容をみると、祖父・祖母あるいは日本の作品・外国の作品毎に異なる傾向をもつとはいえ、そこには共通点も存在する。その共通点とは、祖父母が「孫に具体的な何かを与える存在、孫の人生をサポートする存在」であることである。祖父母は孫のために役立つことを喜びとし、孫はそれに対して感謝の念をもつ。弱った祖父母を支えたいと孫が願い、熱心に看病をし、車椅子を押し、リハビリを助けるのは、その恩に報いるためであり、労りの気持ちからである。もちろん、生涯現役としての貌をもつ祖父母も描かれる。こちらは「ひとりの人間としての現在の生き方が孫に影響を与える存在」ということができる。孫の世話をしたり、知恵を授けたりしながら、自分自身の人生を生きることへの主体的な意志を抱き、何かに取り組もうとする積極性をもつ姿が描かれる。孫にとっては、自分だけをみてくれる、自分のことだけを考えてくれる人間ではなく、一個の独立した人格としての姿を見たり感じたりさせられる存在といえよう。例えば、料理をつくり花を飾って孫たちを迎えることを何よりの楽しみとする一方で、油絵を始め、その精力的な取り組みようと絵の出来映えが皆を驚かせる祖母(H)や、一度は引退した家業に再び取り組もうとする祖父(I)がそれであり、孫は、彼らの行動力・積

極性・意志の強さに対して驚きと尊敬を抱くのである。しかし、このような祖父母の一面が描かれた作品は僅少であり（5作品）、孫との関係性は「サポートする祖父母と感謝し労る孫」という形に圧倒的に偏ったものとなっている。

4.5. まとめ

以上の諸点は次の2点に集約されよう。

1点目は、日本においても祖父母像のステレオタイプ化がみられることである。そこにおいては、「祖父母イコール高齢者」という構図と、「高齢者としての祖父母のステレオタイプ化」を見いだすことができる。即ち、祖父母の外観、日々の活動内容、孫との関係性をみるかぎり、「人生のメインストリームを生きている」(McElhoe 1999, p.255) 存在とは思われないものであった。祖父母は、死、病、喪失、絆を語るために登場させられることが多く、それゆえに、様々な衰えを伴う者として表現される。例えば、呆けの症状が現れ亡くなった祖母は、孫の父によって「にんげんは年をとって死ぬときも、あかちゃんになるんだよ。まっ白なところで天国にいくんだ」と語られる (J)。また、祖父母の服装や居住する家・環境が昔懐かしい雰囲気描かれるのも、彼らによって古きよき時代へのノスタルジーを表現するためと思われる。そのノスタルジーの世界とは確固たる性別役割分業の世界であり、原則として、祖母は表出的役割を、祖父は手段的役割を担っている。これらの諸点は先行研究における知見と矛盾しない。

2点目は、日本の作品における祖親性表現の特徴である。外国作品と比べると、孫一家との同居の多さとそれに由来するアクティビティやメンタリティの違いがあること、性別役割分業の構造がより強固であることが確認された。即ち、日本の祖父母の場合は、同居の有無にかかわらず心理的には孫一家の一員であるほどにその情緒的結びつきは強いものとして描かれ、精神的な自立が確立された人物としては描写されない傾向が強い。その背景には、そのような存在こそが愛すべき祖父母、即ち、愛すべき老人であるとの認識がうかがわれる。全般的に、外国作品は、配偶者を失った孤独や「老い」そのものがもたらす孤独を抱えながら生きざるをえない現実の厳しさを感じさせるものであり、そこからは、孫・子はその辛さや哀しみを簡単に癒すことなどできないことが伝えられる。例えば、ある作品には、祖父が亡き祖母を思い出して泣く場面がある (K)。孫が「ないてるおじいちゃんなんてだいきらいだ」と言うのに対して、母親は「おとなだってかなしいことがあるのよ」と答え、孫は、そこで初めて、祖父の深い哀しみにふれるのである。しかし、日本の

作品では、そうした孤独が正面から描かれることは多くはない。それはなぜか。配偶者の不在や老いの喪失感は、孫や子どもとの結びつきによって容易に代替されるものとされ、血縁が保障する親密性あるいは生活に根ざした一体性としての孫との関係性が、祖父母にとって何よりの支えとなることが当然視されてきたからと考えられる⁽⁸⁾。

5. おわりに

三世代同居の減少によって孫が祖父母と日常的に接触する機会が減るなかで、祖親性イメージ形成における各種メディアの社会化エージェントとしての役割は大きくなりつつある。幼い子どもがふれる書物として、絵本の及ぼす影響力もこれまで以上に大きなものになっていくことが予想される。Hittleman ら (1996, p.15) は、祖父母と孫との交流を描いた作品によって、子どもは、自らの roots を獲得するだけでなく、wings を手に入れなければならないと述べる。即ち、連綿と続く世代のつながりの中で自分が生きていることを知ることで、生きる上での心の拠りどころを得るだけでなく、新しい世界へ飛び出す契機、あるいは、そのための力を得なければならないと主張する。本研究で見出されたステレオタイプ化された祖父母のありようがこれらを与えうるものであるといえるだろうか。否である。というのも、先にも指摘されているように、ステレオタイプ化は現実の祖父母への否定的・差別的な見方や態度をもたらすことにつながるからである。では、この現状に対して我々はどうのように対応すべきだろうか。さしあたり2点指摘することができるだろう。

まずひとつは、絵本の作り手に関する問題である。McElhoe (1999, p.256) のいうように、絵本の作り手が 'stock characters' に頼って祖父母を描き続けることについては再考される必要があるのではないだろうか。絵本が「文学作品」「芸術作品」であることが考慮されるときでも、少なくとも realistic fiction においては、登場人物の魅力やストーリーの面白さだけではなく、その社会的な影響力が自覚されねばならないと考える。特に日本の作家についてはそういえるだろう。今後は、祖親性表現の多様性を実現させることに、より一層関心が寄せられるべきである。例えば、中年世代や健康で元気な祖父母について、あるいは、祖父母の社会との関わり（就労・交友）や生涯発達の側面について、さらには、孫との対等な個対個としての交流や異性孫との交流等様々な世代間関係について、積極的に取り上げられることが望まれる⁽⁹⁾。もちろん、高齢化が様々な衰えや喪失感をもたらすことが必然である以上、祖父母を取り巻く現実が正確に伝えられなければならないと考える⁽¹⁰⁾。重要

なのは、個々の状況に応じて精神の自立や個人の尊厳がどれほど確保されようとしているか、に注目していくことであろう。それらの要請に応えるためには、文学的魅力と社会の現実をバランスよくどう両立させていくか、絵本の評価においてその社会的影響への配慮がどの程度まで重視されるべきなのか、という問いについてさらに議論が重ねられなければならない⁽¹¹⁾。

もう1点は、絵本の利用者の側の問題である。人々が多様な関係性としての祖親性を現実のものとしていくためには、祖父母自身のための教育もさることながら、若い世代のための教育（世代間関係、加齢、高齢者についての教育）も必要である。先行研究においては、子どもに祖父母世代への否定的・差別的態度をもたせないようにするための対策、即ち、教師等がふさわしい図書を選択し、エイジズムやエルダリー、ジェンダー⁽¹²⁾を正しく認識させるための教育プログラムを実施することが提案されてきた（Seefeldt et al. 1978, Cox 1994, Hittleman & Hittleman 1996）⁽¹³⁾。絵本の利用者は、上記のような研究成果を活用するとともに、こうしたプログラムをさらに充実させていく必要がある。図書館においても、所蔵本の選定・収集や各種プログラムの企画運営等のプロセスにおいて、この問題への関心が深められることが期待される。

現実の世界において祖父母が置かれている状況はますます変わっていくだろう。少子高齢化は祖父母世代に自立して生きることを求め、また、離婚・再婚の増加はステップグランドペアレントとステップグランドチルドレンという新しい関係性を生み出していく。そうした変化に注目しながら、絵本のなかの祖父母像がどのように変容していくのかを把握すること、絵本のなかの祖父母像の変化と子どもが抱く祖父母像の変化との連関を検証すること、そして、教育がそこにどのように関わっていくことができるのかを考えることが今後の課題である。

〈注〉

- (1) 祖親性（grandparenthood）という語は、基本的には、「祖父母になること、祖父母であること、祖父母としてふるまうこと」の意であり、祖父母という地位に関するすべて、祖父母が取り結ぶそれぞれの関係性をあらわす。この語がわが国の家族社会学分野においてきかれるようになったのは、1980年代後半以降のことであり、これを独立テーマとする研究はまだ決して多いとはいえない。しかし、近年、家族の多様化・個人化・私事化によって新しい世代間の結びつきが生み出されてきたことや、長寿化が家族周期の変化と世代間関係の長期化をもたらした

ことにより、祖父母という地位や祖父母が取り結ぶ関係性への関心が急速に高まってきている。

- (2) 世代間関係の良否に関する研究の動向や三世代関係のための学習プログラムについては、牧野カツコ 1994, 「三世代関係の良否をとらえる」『家族関係学』13, 51-61頁を参照。
- (3) 祖父母と老人の同一視については安藤の指摘(1989)に示唆を受けた。
- (4) ただし、子どもの本の多くはファンタジー的要素を内包している、即ち、「超自然の日常への侵入」(杉山 1980)が何かしらの形で描かれているため、realistic fiction とはいえ、不可思議な出来事が起こるものも対象に含まれることになる。
- (5) 仕事をもつ祖母が2作品において登場する。ひとりとは家業(個人商店)に従事し(C), もうひとりとはダンス教師である(D)。兩人については、作品中極めて有能で愛情深い主婦としての面だけが強調されているものの、このような祖母像は新しいタイプといえるだろう。
- (6) 例えば、『おばあちゃんの時計』(G)では、「時間とは何か」「ひとはどうやって時を知るか」というテーマで話が展開され、祖母は孫に、「おばあちゃんの、しらがや、かおのしわがふえていくので、わかるだろう？おまえのあたまも、いつかは、おばあちゃんのようになる。人の一生も、いろんなやりかたで、はかれるね。たんじょうびや、いろんな友だちができたり、じぶんが、かわったり、どんなおもいでができるかで」「もっとながい時間は、空をめぐる星ぼしが、おしえてくれる」「ね、星たちは、時っていうものが、時計のなかになんかおさまりきれないって、おしえてくれてる。どんなに大きな、ふりこ時計のなかになんかおさまらなくて、おしえてくれてる。どんなに大きな、ふりこ時計のなかになんかおさまらなくて」と語る。
- (7) Constant (1977) は、児童文学における祖父母と孫との関係性は一般的には温かいものだが、孫が祖父母に対して敵意を示すものもわずかながらあることを指摘し、祖父母と孫の関係性の「牧歌的な」良好性が将来にわたって描かれ続けるのかどうかに注目する。今回検討した絵本のなかに世代間のコンフリクトが描かれているものは見あたらなかったが、絵本の世界における世代間関係の良好性の行方も注目されるところである。
- (8) 外国作品の場合、原題に grandma や grandpa という語が含まれていなくとも、邦題には、おばあさん、おじいさんという語が入っている例も多い。つまり、邦題は「孫からみた祖父母」という視線の方向が強調されたものとなっている。このことも、祖父母世代をひとりの個人として見ずに、祖父母という地位としてとらえようとする姿勢がわが国においてより強いことを示しているとはいえないか。

子ども絵本における祖親性表現

例えば、Feather Pillows は「おばあちゃんのはねまくら」、Mr. Jordan in the Park は「おじいちゃんのこうえん」と訳される。タイトルを含め、原作がどのように翻訳されているのかということも重要な問題といえる。

- (9) 世代間関係とは常に選好的に構築されつづける可変的なものであるという認識も重要と思われる。
- (10) 近年、老人性痴呆を取り上げた作品が現れてきたことは意義深い。例えば、「わすれないよおばあちゃん」(L)、「わすれないよおじいちゃん」(M)は痴呆が進行しつつある祖父母と孫との交流を描いたものであるが、記述内容の正確さを期すために ADRDA (Alzheimer's Disease and Related Disorders Association) の協力を得て制作されている。
- (11) 児童文学における社会問題の記述については、「教育的・社会的な理論にのっとってもち込まれるのではなく、生き生きと語られる物語の一部として」描かれる「感情的リアリズム」が必要との主張がなされている (Hunt 訳書 2001, 371 頁)。
- (12) ジェンダー視角からの祖親性研究の動向を簡単に述べておく。祖母・祖父の異同に関わる研究を一覧すると、基本的には、女性が家族の結びつきに対してより深く関わるように社会化され 'kinkeeper' としての働きが期待されていること、あるいは、そうした能力に秀でていることを根拠として、祖母の方が孫とより緊密な関係を形成しうるとの前提にたつものが多い。そこにおいては、祖母の役割は母性的・表出的、祖父の役割は手段的なものとされる (Baranowski 1990, 前原他 2000)。しかし、こうしたいわば伝統的ジェンダーロールに基づく視点に対する批判のなかから、祖母を基準として祖親性を測るのではなく、祖母・祖父の違いをそれぞれの特徴として把握し、また、両者の共通点をも見いだそうとする視角が現れつつある (Thomas 1989, 清水 1994)。例えば、Thomas は、責任感情や、孫との結びつきが人生に占める重要度等多くの点において両者に違いはなく、さらに、これらの性役割は中高年期において androgyny なものになっていくとして、その個別性を主張する。このように、伝統的なジェンダー観を超えて、男女それぞれにとっての祖父母経験の意味するところをとらえ、それを踏まえて、満足度や負担感あるいはストレスについて考察する研究が充実しつつある。
- (13) Seefeldt ら (1978) は、生徒に高齢者についての正確な知識を与えるだけではなく、実際に高齢者との交流をさせることの有効性を説く。例として、Grandperson Program (高齢者ボランティアをクラスに招き、話をきいたり、一緒にパンを焼

く等の共同作業をする)を利用すること,自分の祖父母へのインタビューを体験させること,があげられている。Cox (1994)も,加齢についての正確な知識,ディスカッション,祖父母世代の人々との実際の対話の必要性を指摘する。また, Hittleman ら(1996)は,祖父母と孫との関わりを取り上げた本を利用して社会科を教える際の学習プランを具体的に提案している。この他,教師や親のためのノン・エイジストのブックリストも作成されている (McGuire 1992, Crawford 1996)。

〈文献〉

- 安藤究 1989,「祖親性研究序論～社会変動と祖親性研究」『上智大学社会学論集』14, 105-30頁。
- Anselmo, E. F. 1978, "Ageism-The Subtle Stereotype," *Childhood Education*, Vol. 54, No.3, pp.118-122.
- Baranowski, M.D. 1990, "The grandfather-grandchild relationship : Meaning and exchange," *Family Perspective*, Vol.24, pp.201-215.
- Beland, R.M. & T.L. Mills 2001, "Positive Portrayal of Grandparents in Current Children's Literature," *Journal of Family Issues*, Vol.22, No.5, pp.639-651.
- 美谷島いく子 2002,「絵本を資料に異世代交流を考える『リーベとおばあちゃん』」『松本短期大学紀要』11, 93-106頁。
- Constant, H. 1977, "The Image of Grandparents in Children's Literature," *Language Arts*, Vol.54, No.1, pp.33-40.
- Cox, A. 1994, "Learning With Literature : Celebrating Grandparents," *The State of Reading*, Vol.1, No.2, pp.21-27.
- Crawford, P.A. 1996, "Exploring Books That Connect The Generations," *Language Arts*, Vol.73, No.5, pp.352-358.
- Hittleman, C.G. & D.R. Hittleman 1996, "Grandparents and Grandchildren in Children's Literature : Interactions That Enhance Learning," Paper presented at the International Reading Association, World Congress on Reading, Prague. ERIC, ED397391, pp.1-23.
- 堀川道代 2002,「絵本・児童文学に見る高齢者のイメージ-高齢化とイメージの変化-」『四條畷学園短期大学研究論集』35, 45-57頁。
- Hunt, P.(ed.) 1995, *Children's Literature-An Illustrated History*, Oxford University

- Press. (=2001, さくまゆみこ他訳『子どもの本の歴史』柏書房).
- Janelli, L.M. 1993, "Grandparents' Depictions in Children's Literature : A Revisit," *Gerontology & Geriatrics Education*, Vol.14, No.2, pp.43-52.
- 前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝 2000, 「続柄の違う祖父母と孫の関係」『教育心理学研究』48, 120-137頁。
- Mavrogenes, N.A. 1982, "Positive images of grandparents in children's picture books," *The Reading Teacher*, Vol.35 May, pp.896-901.
- McElhoe, J.S. 1999, "Images of Grandparents in Children's Literature," *The New Advocate*, Vol.12, No.3, pp.249-258.
- McGuire, S.L. 1992, "Non-Ageist Picture Books. An Annotated Bibliography for Preschool-Primary Level," *ERIC*, ED347515, pp.1-25.
- 追田典子・大沼好子・小林真由美・佐々木佳子・芳担美重子・仲西ひろみ・鈴木招代 1998, 「創作絵本のなかの子どもたち, 老人たち」『母子研究』19, 87-97頁。
- Seefeldt, C., A.Galper, K.Serock & R.K.Jantz 1978, "The Coming of Age in Children's Literature," *Childhood Education*, Vol.54, No.3, pp.123-127.
- 清水美知子 1994, 『祖父母と孫のかかわりに関する調査研究報告書ー祖父母の「孫育て」をめぐるー』兵庫県長寿社会研究機構・家庭問題研究所。
- 杉山洋子 1979, 『ファンタジーの系譜』中教出版。
- Thomas, J.L. 1989, "Gender and Perceptions of Grandparenthood," *International Journal of Aging and Human Development*, Vol.29, No.4, pp.269-282.
- Watson, J.J. 1981, "A positive image of the elderly in literature for children," *The Reading Teacher*, Vol.34 April, pp.792-797.

文中引用した絵本

- A プーパ・モントフィエ 1986, 『アルザスのおばあさん』西村書店。
- B としまさひろ 1988, 『たろうとおじいちゃん』PHP 研究所。
- C くりたさおり 2002, 『おばあちゃんの日』偕成社。
- D いせひでこ 1990, 『ふたりでるすばんでできるかな おばあちゃんだいすき』偕成社。
- E モニカ・ギーダール 1990, 『こころのなかのおじいちゃん』アーニ出版。
- F ミシェル・ドーフレンヌ 1991, 『おばあちゃんまたあした』セラー出版。
- G ジェラルディン・マッコーリー 2002, 『おばあちゃんの時計』評論社。

- H ウェンディ・ケッセルマン 1998, 『エマおばあちゃん』 徳間書店。
- I 小松千明 1984, 『おじいちゃんのコッペパン』 バンダイ。
- J 大森真貴乃 1987, 『おばあちゃん』 ほるぷ出版。
- K ジュディス・ケイスリー 1987, 『おじいちゃんがきたひから』 文化出版局。
- L ボンダ・ミショー・ネルソン 1992, 『わすれないよおばあちゃん』 日本評論社。
- M ドナ・ガスリ 1990, 『わすれないよおじいちゃん』 日本評論社。

ABSTRACT

Depictions of Grandparents in Children's Picture Books

ONODERA, Rika

(Graduate School of Education, University of Hokkaido)

Kita-11, Nishi-7, Kita-ku, Sapporo, 060-0811 Japan

Email: vault@jeans.ocn.ne.jp

Children's picture books are one means through which children learn and develop attitudes towards grandparents.

The purpose of this study was to investigate the characteristics used by authors and illustrators to describe grandparent characters. A total of 71 children's picture books published in Japan since 1980 were selected and the contents analyzed. The physical traits used to describe grandparents, the settings in which grandparents are portrayed, the activities that grandparents engage in within their families, and the relationships between grandparents and their grandchildren were examined. The following findings were made.

(1) In general, grandparents in children's picture books are dominated by the stereotype of being old.

It is clear that the images of grandparents in picture books do not represent the multiple realities of the grandparents of the readers of these books. Their grandparents are often still in the mainstream of life. A very large number of books use grandparents as a vehicle to explain to youngsters some state of dependency or poor health. Grandmothers are more likely to be involved in cooking and caring for grandchildren, whereas grandfathers are more likely to be involved in teaching activities and storytelling.

(2) In Japanese picture books, grandparents are often depicted as not being able to live alone and as being dependent on their children for survival. Consequently, grandparents in these books are overwhelmingly portrayed as not being independent.

This stereotyping of grandparents is a form of "ageism." Authors and illustrators need to present a variety of books depicting a diversity of grandparents. Parents and educators need to give actual experiences with a variety of grandparents in order to challenge stereotypic thinking.